

T I C A D 9 : 閉会式
石破茂総理大臣スピーチ

御列席の皆様、

1993年にT I C A Dが始まってから今年で32年。この30年の間に、世界は劇的な変化を遂げました。1990年代、日本は世界のGDPの約17%を占めていましたが、現在は約4%。冷戦直後の1990年代は、アフリカにとって、アフリカへの関心が下がり、紛争や感染症にも見舞われた厳しい時代でした。しかし、若い人口と豊富な資源を背景に、アフリカ連合（AU）がG20の正式メンバーになるなど、アフリカの国際社会における影響力が高まっています。

アフリカ、そして世界の変化のスピードの増す中、30年後はどのような世界になっているのでしょうか。2050年には世界の人口の4人に1人がアフリカ出身となると言われています。アフリカが世界の成長の中心となり、世界をリードしていくことでしょう。

今回のT I C A D 9では、「革新的な課題解決策の共創」をテーマに掲げ、日本の技術や知見及びアフリカ発のソリューションを相互に生かして、どのようにアフリカ及び国際社会における課題解決策を共創していくかについて、日本、アフリカ各国、国際機関、民間企業、市民社会など、多様な立場から活発な議論が行われました。

議長として、議論に参加いただいた全ての皆様、特に共同議長を務めていただいたロウレンソ・アンゴラ大統領、岸田議長代理、そしてT I C A D 共催者の皆様に、心から御礼申し上げます。このT I C A D 9を開催するに当たって、多くの方々の長い時間にわたるご尽力に感謝申し上げます。

3日間の充実した議論は、「T I C A D 9 横浜宣言」にまとめられ、皆様のお手元に配布させていただきました。

（「横浜宣言」を掲げながら）この宣言を、皆様と共に採択したいと存じます。よろしいでしょうか。

ありがとうございます。これにて、「T I C A D 9 横浜宣言」は採択されました。

1993年のT I C A D初開催から、30年以上が経ちました。この間、アフリカの成長・変化にも合わせ、T I C A Dでの議論は、アフリカの開発から、アフリカへの投資、そして日本とアフリカによる革新的な課題解決策の共創へと深化してきました。

その中で、初日に申し上げたとおり、T I C A D 9では、分野横断的な重要項目の一つとして、若者・女性に焦点を当てた議論がなされました。

本体会合のみならず、テーマ別会合などでも、日本とアフリカの若者が、30年後のあるべき未来像の実現のために、今何を行うべきかについて熱心に議論を行いました。

それぞれの地で活躍する双方の若者が、これから形作っていく未来。そこには、日本とアフリカが共に繁栄する、素晴らしい未来が待っているに違いありません。

この閉会式には、ユース団体を代表して、ポンデウさんと休場さんに出席いただきました。皆様、拍手をお願いします。

今回のT I C A D 9では、皆様方の積極的なご議論を通じ、雇用、産業育成、保健、食料などの様々な課題に対する革新的な解決策を日本とアフリカが共創する方途について、非常に多くのアイデアが共有されました。また、これらの解決策を発展させ、日本とアフリカの連携を一層強化していくことでも一致しました。

アフリカは、世界の温室効果ガス排出量への影響が非常に小さいにもかかわらず、気候変動による最も深刻な影響を受ける地域の1つだと言われています。具体的には、洪水、干ばつなどの異常気象による被害、農業や人々の健康への影響などが挙げられます。これはアフリカの課題が世界の課題と結びついている一例です。アフリカの課題の解決が、日本を始めとする世界の課題につながっていくのです。

アフリカにはウブントウの精神、南アフリカのズールーの人々の哲学が受け継がれていると承知します。これは、「あなたがいるから私もいる。」という意味で、人は相互の関わりと絆によって生かされていることを示しています。

日本とアフリカが有する豊かな人材や技術、知恵を持ち寄り、課題解決を通じてより繁栄を目指す。こうした大きな目標に向けて、人や産業を育てる歩みを共に力を合わせて進めていくことが何よりも重要ではないかと考えています。

今、世界は100年に一度の歴史の大転換点を迎えています。100年前の歴史を振り返ると、1914年から1918年まで第一次世界大戦、1917年にはロシア革命が起こりました。1918年から1920年までスペイン風邪が世界を襲い、何千万人もの人が命を落としたと言われています。1929年にはウォール街で株価が大暴落し、世界大恐慌が始まりました。1939年から1945年まで第二次世界大戦、今年（2020年）は広島と長崎で原爆投下から80年に当たります。私たちは、二度と大戦争を繰り返してはなりません。核兵器が使われることも決してあってはなりません。パンデミックが起こることがあってはなりません。経済が破壊されるような大恐慌があってはなりません。100年前と同じことが起こるとは言いませんが、今も100年前を似たようなことが起こっています。国際社会でも分断が進み、国際秩序も大きな挑戦に直面しています。私たちが直面する挑戦を繁栄の機会とすることができるか。それはアフリカの未来への投資であり、現場での課題解

決策の共創であり、地道に1人1人の人材を育成していくことを一つ一つ積み上げていくことではないでしょうか。こうしたことをアフリカの皆さんと確認し、これからの30年を日本とアフリカの協力を定義付ける重要な機会となり、T I C A D 9は大きな成果を収めたと考えます。

日本は、アフリカの皆さんと共に笑い、共に泣き、共に汗をかきながら、アフリカが直面する課題の解決に一つ一つ取り組んでいきます。ただアフリカのためではなく、日本のためでもなく、世界のためです。

今回の会合が、今後のアフリカのめざましい飛躍と、日本とアフリカのより強固なパートナーシップの新しい出発点として皆様の記憶に残ることを心より願っています。

「教えに来たのではありません。習いに来たのです。」

開会式で申し上げた、ガーナで黄熱病研究に取り組んだ野口英世博士の言葉です。T I C A D 9を終えるに当たり、この言葉の意味を実感しています。私自身、多くのアフリカのリーダーの方々との率直な意見交換を通じて、多くの学びを得ることができました。

改めてT I C A D 9の成功にご尽力いただいた関係の皆様方に感謝申し上げます。ありがとうございました。